感性を育む和学講座第 33 回

神嘗祭・着物文化へのいざない

　神嘗祭はその年の実りである新穀（初穂）を天照大神に捧げる感謝祭です。
天照大神を祭神としている伊勢神宮で行われます。

　稲作は天照大神が瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）を中つ国（日本神話における地上界。転じて日本）に降り立つ、いわゆる天孫降臨の際に稲を授けてお言葉を述べられた「斎庭（ユニワ）の稲穂の神勅」に由来しています。
「斎庭の稲穂の神勅」は天照大神が瓊瓊杵尊に託した三大神勅のひとつです。

三大神勅とは

1. 天壌無窮の神勅

原千五百秋瑞穂の国は、是、吾が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫、就きて治らせ。行矣。宝祚之隆えまさむこと、当に天壌と窮り無かるべし。

あしはらのちいほあきのみずほのくには，これ，あがうみのこのきみたるべきつちなり。なむぢすめみまゆきてしらせ。さきくませ。あまつひつぎのさかえまさむこと，あめつちときはまりなけむ

2. 宝鏡奉斎の神勅

吾が児、此の宝鏡を視まさむこと、当に吾を視るがごとくすべし。与に床を同くし殿を共にして、斎の鏡となすべし。

あがみこ、このかがみをみまさむこと、まさにあれをみるがごとくすべし。ともにゆかをおなじくし、とのをともにして、いはひのかがみとなすべし。

3. 斎庭（ゆにわ）の稲穂の神勅

吾が高天原に所御す斎庭の穂を以て、亦吾が児に御せまつるべし。

あがたかまはらにきこしめすゆにはのほをもて、またあがみこにまかせまつるべし。

稲作は、天つ神より委任を受けたものであり、実りは神様のお陰であり、神のものであるから、まず新穀を神々に献上して、天皇は残りをいただくという精神に沿った祭祀が神嘗祭です。

「神嘗」の「饗」は食べ物でもてなすという意味があります。
神様を食でもてなすのが「神嘗」となります。

天照大御神は神饌を掌る外宮の豊受大御神に奉るゆえに、神嘗祭は伊勢神宮では「外宮先祭」となっています。

- 由貴夕大御饌（ゆきのゆうべのおおみけ） 夕食のこと 海川山野の食材 30 種とお酒を神前にお供えします。
- 由貴朝大御饌（ゆきのあしたのおおみけ） 朝食のこと
- 奉幣（ほうへい）の儀 天皇陛下よりの賜りもの（幣帛・神前の供物）を勅使が神様に献上
- 御神楽（みかぐら） 神様を慰めるための舞を奉納

神嘗祭は伊勢神宮では最も重要な祭祀で、伊勢神宮においては神嘗正月といわれ、装束や器具を新しいものに取り替えます。
飛鳥時代後期の大宝律令制定時に「神祇令（律令の中で神祇に関する制度）」には国家祭祀の一つに神嘗祭が明記されました。奈良時代には、天皇陛下から伊勢神宮へ幣帛使（神様へ供物を献上する特使）が遣わされます。
平安時代には、宮廷の年中儀式となりました。
伊勢神宮への例幣使派遣は応仁の乱以降中断されますが、1647年後光明天皇の特旨により、例幣使派遣が復活されてからは中断されずに行われています。
1871 年（明治 4 年）以降は幣帛使派遣に加えて、皇居の賢所において天照大神に神饌を献上し神嘗祭の儀式が行われています。神嘗祭の儀式に先立って、天皇陛下は伊勢神宮を遥拝（遠くから拝む）されます。
1908年（明治 41 年）制定の「皇室祭祀令」では大祭に指定されています。
「皇室祭祀令」は 1947 年（昭和 22 年）5 月 2 日に廃止されたのですが、それ以降も

宮中および伊勢神宮では従来通りの神嘗祭が行われています。

着物文化へのいざない

着物の成り立ち

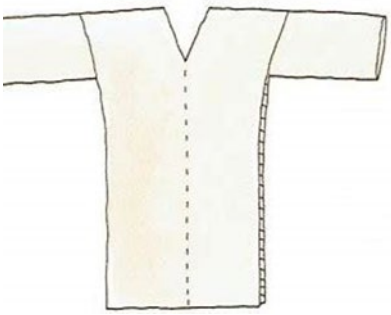
1.弥生時代～古墳時代

・魏志倭人伝に記されている

男性は一枚の布を体に巻き付けており、女性は貫頭衣（かんとうい）という、袖なしの布を着ていた。

・貫頭衣が着物の原型

二枚の布を織り、縫い合わせて前の中央は縫わず、重ねて紐を　結び、それ



にやがて袖をつけた。

・左衽着装法（古墳時代）

貫頭衣に筒袖を着け、下に男性はズボンのようなもの、女性はスカートのようなものを身に付けていた。

大陸の影響で「左衽着装法」があり左前、現代の着物と反対で右が上になるように着ていた。

2.飛鳥・奈良時代～平安時代

中国との交流が盛んになり、仏教をはじめ、多くの文化が伝わる

支配階級と被支配階級との装いも違いがでてくる。

中国では支配階級層が着ていた衣服は袖口が大きくゆったりとした仕立ての「深衣（しんい）」または、当時中国を支配していた漢民族が着ていたので「漢服」と呼ばれていた。

被支配階級層が着用していた衣服は「胡服」と呼ばれ、袖は筒状で身体にフィット。

「胡服」は中央アジアの遊牧民の胡民が着ていた。

活動に適した衣服なので、漢民族の中の被支配階級層の人々も着用。

労働しない身分の高い者は袖口も大きくゆったりとした衣服を着用し、 身分の低い者は労働の必要があるのでぴったりした動きやすい衣服を着用する、という価値観。

元正天皇時代(715 年～724 年。第 44 代天皇。生涯独身の女性天皇)の

「衣服令」の中にある一文「初令天下百姓右襟」によって右前、左を上に着るように定められ現代に至る。

平安時代の公家社会では、気温の変化に応じて、小袖の肌着のうえに大きな袖口の衣服を重ねていく重ね着が生まれる。

何枚も重ねると動きにくくなるのは当然であり、あまり労働の必要がない貴族社会で、支配階級の象徴として重ね着が取り入れられる。

男性の正装である束帯や、女性の正装である十二単がその代表。

3.室町時代～江戸時代

武家社会において公的な場や重要な儀式では、武家男子は公家風の「大袖」衣装を着用し、私的な日常生活では袂のある袖で絹の「小袖」。また、通常の儀式では重ね着を略して、大袖は持っていますが、丈は短く小袖の上に袴と合わせて着用する「直垂(ひたたれ)」という武家独自の大袖を着用。

室町時代の後半になると、庶民は常に麻の小袖、武家は日常には絹の小袖を着る。
さらに桃山時代の頃になると、庶民の中から町人と呼ばれる人が出てきて、袂のある袖の絹の小袖を着用。
公家を除くほとんどの人々が袂付きの小袖を着るようになり、「小袖」が日本の衣服の中心となる。
ただし、この頃は男女における小袖の大きな違いはない。

江戸時代になると、男性と女性で衣服に大きな変化が生じる。
封建制度が確立されると、公的な世界である「表」と私的な世界の「奥」という概念が生まれる。
表にいる男性が社会の秩序や規則を決め、女性は奥の世界を取り仕切るという建前。
衣服は身分を象徴させるという考えから、表にいる男性の衣服は固定化。個人の好みに基づいた、または時代の変化に伴う流行現象は生じなかった。
奥の世界に生きる女性には、社会秩序を乱さない限り、衣服に対しては自由な選択が許されていた。
ゆえに江戸時代の女性たちは身分の違いによって、それぞれの好みや美意識を小袖に反映して流行を生み出していく。
女性の帯が広くなり、友禅染、鹿の子紋などが流行る。

4. 明治時代～現代

明治になると、「小袖」は「きもの」と呼ばれ、西欧文化を取り入れたため、正式な衣服は洋装となる。
また、西欧のブラックフォーマルから、「きもの」にも喪服や留めそでが黒になっていく。
洋服が高価であったため町人や庶民は着物を着用。
明治時代には女性用の袴も登場。
昭和20年に戦争が終わると日本社会全体がアメリカに傾く。
着物より短時間で着ることができる洋服が日常的な衣服。

着物を着用する機会が無くなり、和裁ができる人も減っていき、着物が高価な衣服となっていき、日本人の着物離れは加速。

　それでも、着物は無くならない。
日本文化の象徴として、また世界で最も美しい民族衣装として世界中の人々が憧れる衣服として存在し続ける。

着物の作法と組み合わせ

「着物」とは字のごとく、着る物であり、本来は洋服・和服に拘らず、衣服全般を表す言葉です。明治時代に西洋の衣服が入ってきて「洋服」に対して「和服」と称されるようになり、「着物」が「和服」と同じ意味を持つようになったのです。

　また、現代では「着物」と「呉服」が同じような意味を持ちますが、元々は別物でした。
「呉服」は古代中国の春秋時代に存在した「呉」の国から反物を織る「機織り」の技術が伝わり、その技術で織られた反物を「呉服（くれはとり）」と呼ばれるようになりました。
次第に絹織物全体を表す言葉となっていきます。そして「くれはとり」は「ごふく」と呼ばれるようになったのです。
　ゆえにルーツから観ると、「着物」は衣服で、「呉服」は反物、絹織物を表す言葉ということになります。

　着物の格は大まかに分けると下記のようになります。

着物の種類	具体的な着物の名称
正装・フォーマルな礼装着物	黒留袖、打掛、本振袖、喪服
略礼装着・準礼装着	色留袖、訪問着、振袖、色無地
外出着	付け下げ、江戸小紋、小紋、小紋友禅、絞り、お召、更紗
普段使い・カジュアルな着物	紬、絣、黄八丈、銘仙、ウール、木綿、デニム、夏用、浴衣

染めの着物と織りの着物がありますが、格は**染めの着物が上**となります。
着物には染めの着物と織りの着物があります。または「後染め」「先染め」とも言います。

染めで有名なのが**「友禅染」**です。

江戸時代、京都の扇絵師である宮崎友禅斎に由来します。
宮崎友禅が、その扇絵の画風を小袖の文様に応用して染色したのが友禅染です。
京友禅、加賀友禅、東京友禅が三大友禅と言われており、それぞれ特徴があります。

京友禅
本家本元の友禅染。
金糸、金箔、銀箔の多用
内側が濃く、外側が薄いぼかし技法
制作工程が多いので、各分野の専門職人たちの分業制

制作工程
1 図案作成　2 下絵（生地を仮縫いして下絵を描く）　3糸目糊置き（仮縫いをほどき下書きに沿って糊を置いておく）　4地入れ（染料を定着させるため豆汁を塗る）
5挿し友禅（筆で染料を着物に挿してゆく）　6蒸し（染料定着のために高温で蒸す）

7伏せ糊（柄の上に糊を塗る） 8地染め（大きな刷毛で地色を染める）
9蒸らし（再度蒸す） 10水元（糊や不要な染料を水で洗う 友禅流し）
11湯のし（小じわをとる） 12装飾（箔を加える）

加賀友禅

宮崎友禅斎が晩年加賀に住み、その技法を加賀の染に取り入れた。
金箔、銀箔は使用しない。
加賀五彩（臙脂、藍、黄土、草、古代紫）を基調とする。
内が薄く、外が濃いぼかし。
写実的で「虫食い」技法を使われる。

東京（江戸）友禅

江戸の呉服屋が宮崎友禅斎に頼ったことから、絵師や染師によって東京手描友禅が広まっていきます。多くの工程を一人の職人で行います。
奢侈禁止令が出た江戸の町ですので、色数も抑えられ、その分粋な洗練されたデザインが特色となっています。
白、藍、茶が基本色
柄は千鳥、磯の松など江戸の風景を描いたものが多いの
が特徴でもあります。

なお、江戸友禅と江戸小紋は 別物です。
江戸友禅は手描きですが、江戸小紋は型染めです。
江戸小紋は細かい柄が着物全般に施されており、武士の裃に使われていました。
特に、「鮫」「行儀」「通し」「大小霰（だいしょうあられ）」「縞」の文様は格が高く、
紋を付けるとフォーマルな場面にも着用できます。
江戸友禅と江戸小紋は 別物です。

織りの着物

織りの着物（先染め）とは、糸の段階で染めてから織りあげ模様を表している着物です。繊維の奥まで染めるため、染が堅牢になります。ゆえに染めの着物よりしっかり、パリッとしていて丈夫です。
織りの着物で代表格が「紬」です。紬以外にもお召しや木綿、ウールなども織りの着物に入ります。

紬での代表は大島紬、結城紬などがあります。

大島紬

奄美大島の伝統工芸品。世界の三大織物の一つ。
1300 年の長い歴史を持ち、着物の女王と云われていまず。しなやかで軽く、シワになりにくい。糸に鉄分が沁み込み、着崩れや虫食いが起きにくいため、孫の代まで長く使えるという特徴があります。

結城紬

茨城県結城市周辺、隣接する栃木県小山市、下野市などで生産される絹織物です。
歴史は奈良時代にまで遡ります。
平成 22 年（2010 年）には記録に残る最古の絹織物としてユネスコの無形文化遺産に登録されています。地厚なので暖かいのが特徴です。
大島は三代、結城は末代まで、と言われているほど丈夫です。

男性の着物

黒紋付羽織袴

色紋付羽織袴
・準礼装　略礼装
羽織袴

・お洒落着
　　羽織
・普段着
　　着流し

帯について

丸帯
　幅約 30 ㎝～32㎝　長さ約4m～4m50 ㎝
　最も格が高い帯　裏面も表地
　花嫁さんの帯　舞妓さんのだらり帯

袋帯
　幅約 31 ㎝　長さ約4．2m
　格の高いフォーマル用とお洒落用のしゃれ帯
　二樹太鼓、振袖の変わり結び

名古屋帯
　　幅約 30 ㎝　長さ約3．5m
　　セミフォーマルとカジュアルがある

半幅帯
　　幅約 16 ㎝　長さ約3．5m
　　浴衣や普段着（ウールや紬）に使用

帯も「織り」と「染め」がありますが、着物と逆で
「織り」が染め帯より格が上です。

着物と帯の格を合わすのが、着物のセオリーです。
また、柄は季節を少し先取りするのが粋でお洒落と言われています。

ただ、洋花は季節を問わないとされています。

着物と帯、そして帯締め帯揚げなどの小物も含めて、和装ならではのコーディネートは洋服とは全く違います。それも着物の楽しみです。

着物の効用

・姿勢が良くなる
・絹は東洋医療で効果が認められている
・所作が落ち着く
・女性は生理が軽くなる
・下駄、草履は足に優しく、運動神経が良くなる
・保湿性がある

着物のデメリット

・俊敏な動きが難しい
・着付けに時間がかかる
・凝れば高くつく
・手入れに時間、お金もかかる